

『あなたのための救い主』井上隆晶牧師
イザヤ9章1～6節、ルカ2章8～20節

①【天が近づいて来たのがクリスマス】

クリスマスおめでとうございます。イエス様が生まれた夜、羊飼いたちが野宿しながら夜通し羊の群れの番をしていました。夜空には星が瞬いていたことでしょう。すると突然、光り輝く天使が現れ羊飼いたちに近づいて来ました。彼らはその光に照らされ、暗闇であった大地はその光で明るく照らされました。聖書はこう書いています。「主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。」

（ルカ2：9～11）真っ暗闇の中にいる時にスポットライトを当てられるとまぶしくて何も見えません。その何百倍の光に照らされたと考えてみてください。神の光の到来、これがクリスマスの最初の特徴です。天使は言いました。「『恐れるな。私は、民全体に与えられる大きな喜びを伝える。今日、ダビデの町であなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。』」（ルカ2：9～11）聖書の時代では「神を見た者は死ぬ」（出エジプト33：20）、「神の言葉を聞いた者は両耳が鳴る」（サムエル上3：11、出エジプト20：19）と言われていました。しかし宗教とは縁のないような生活をしていた貧しい羊飼いたちに神の言葉は告げられ、彼らのようなどん底で生きている人に神の栄光は届けられたのです。最も低い所にまで神は降りて来られたのです。それはすべての人を救いに引き上げるためです。ここにキリスト教の特徴がよく表われています。この世の宗教は人間が頑張って良い人になり、天国に登らなければなりません。それは下から上への運動です。しかしキリスト教は全くその逆です。神の方から人に近づいてくる、天国が地上に降りて来るのです。つまり上から下への運動です。主の天使は羊飼いたちに近づき、地上に天の光が届きます。その光で地上は栄光に輝きます。天使たちの大軍が現れ、地上に向かって「いと高きところには神に栄光あれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」（ルカ2：14）と讃美をし、地にある者たちを祝福します。こうして天と地が一つに結ばれ、神と人が一つに結ばれ、闇と光が一つになるのがクリスマスなのです。降って来てくれるという事、ここに私たちの希望があります。それを思い巡らしていたら古代教会の聖土曜日（受難週）の説教を思い出しました。

●「主は勝利をもたらす十字架という武器をもって、彼らのもと（地獄）に入って来られました。…そしてアダムの手を取って起こしながら言われます。…私の権威をもって命じる。鎖につながれている者には『出よ』、闇にいる者には『光を受けよ』、眠りにについている者には『立ち上がれ』と。…私は、あなたが陰府の国にいつまでも捕らわれの身でいるためにあなたを造ったのではない。死者の中から起き上がれ。私は死者のいのちである。私の手で造られた者よ、起きよ。…立て。ここから出て行こう。敵はあなたを楽園から連れ出した。しかし、私はあなたを楽園に

ではなく天の玉座に着ける。私は命の木からあなたを遠ざけたが、見よ、今や命そのものである私とあなたと一つに結ばれた。」

ですから救いとは、この降って来られた神の子キリストの招きに応えることです。降ってきた天国に入ることです。キリストの伸ばされた手に、あなたの手を伸ばすことです。キリストの到来と共に、天のあらゆる富が地上にもたらされました。切れてしまった天の世界と地上の世界はキリストによってつながり、切れてしまった神と人はキリストによって結ばれました。だからこそ私たちはこの日を祝うのです。

②【救いとは何か？】

救い主というからには私たちに救って下さるのです。皆さんは何から救ってほしいですか？仏教では四苦八苦と言って、人生には「生老病死」（生きる、老いる、病む、死ぬ）という四つの基本的な苦しみと、「愛する者と別れる苦しみ」、「嫌な人に出会う苦しみ」、「求める物が得られない苦しみ」、「肉体と心が思うがままにならない苦しみ」の合わせて八つの苦しみがあるといえます。それらから救われることも確かに救いであり、必要です。イエス様も最初は病気を癒し、死人を生き返らせ、食べ物を与えられました。それでも人の心は満たされなかったのです。世の人は問題がなくなる事、自分の周りが良い環境になることが救いだと思い、そのために全力を注ぎます。しかし本当にそうなのでしょうか？問題はすべて自分の周りにあるのでしょうか？私はそうは思いません。私が欲しいのは自分の周りがどんなに暗闇でも「愛が見える心、満足し、感謝し、喜ぶ心」なのです。私がキリスト教を求めた動機は、大人になると幼い時のような素直で、満足し、喜ぶ心がなくなってしまったからです。自分の周りを変えるのではなく、自分が変わりたいのです。

●先日、心の病の勉強会でギャンブル依存の夫を持つAさんが「最初は夫を何とかしようとしていた。でも何をしても夫は変わらなかった。夫を変えようとする自分の力を手放したら、夫が変わった。自分が変わることによって夫が全く変わってギャンブルをしなくなった。」とおっしゃっていました。」

この後、羊飼いたちは飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を探し当て、「見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った」（ルカ2：20）と書かれています。イエス様が来たからと言って、彼らの生活や貧しさは何も変わりません。彼らは何も変わらない現実の世界の中に喜び、賛美しながら帰って行きました。世界は変わらなかったけれども、彼らの心が変わったからです。こんな自分でも神様に愛されていたのだということを知ったからです。これが幸せの秘訣です。

③【クリスマスは十字架につながっている】

クリスマスは神の独り子キリストが生まれた喜びの日なのですが、何か悲しみと闇を感じます。キリストが生まれる時、誰も宿屋に泊めてくれませんでした。この世

は最初からこの子の誕生を歓迎しませんでした。その後、幼子はヘロデ王に命を狙われてエジプトに逃げます。身代わりに多くの幼子の命が奪われました。キリストの周りにはいつも人間の罪が渦巻いていました。飼葉桶の中に布でくるまれたイエス様は、墓の中に亜麻布で巻かれて葬られたイエス様を連想させます。クリスマスと十字架はつながっています。この幼子は最初から死ぬために生まれました。人間のすべての病い、憎しみ、怒り、罪、死を背負うために生まれたのです。老人シメオンは母マリアに預言します。「この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするために定められ、また反対を受けるしるしとして定められています。」(ルカ 2:34~35) この小さい赤ん坊の上にすべての人間の罪が背負わされることが定まっていたのです。

イエス様は十字架の上から自分を殺す者たちを赦し「父よ、彼らをお赦し下さい。自分が何をしているのか知らないのです。」(ルカ 23:34) と祈られました。この祈りを聞いて人生が変わった人が多いのです。私もそうです。この十字架において、神の愛、キリストの愛は完全に現れました。

●カリストス・ウエア主教はこう書いています。「何が成し遂げられたのか。受難する愛の勝利、愛の憎しみへの勝利に他ならない。キリストは自分の者たちを極限まで愛し抜いた。愛ゆえに世界を創造し、愛ゆえに人としてこの世界に生まれ、愛ゆえに私たちの損なわれた人間性をご自身のものとして担った。愛ゆえに私たちの苦難を分かち合った。愛ゆえにご自身を犠牲としてささげ、ゲッセマネの園で進んで苦難を受けることを決意した。…十字架の時、闇の力はイエスを攻撃して荒れ狂う。しかしそれはイエスの被造物への憐れみを憎しみに変えることは出来ない。愛はそんな妨害をはねのけて愛そのものであり続ける。主の愛は最も困難な地点で試みられるが、打ち倒されない。『光は闇の中に輝いている、そして闇はこれに勝たなかった。』」

キリストは「愛そのものであり続ける」。すごい言葉です。神の愛にはかないません。何をしても、良いものしか出て来ないのです。罵っても赦し、裏切っても愛し、傷つけても命の血を流し、殺しても復活してしまいます。キリストの愛にはかないません。この方の愛を知った人は、憎しみが消えてしまい、怒りも飲み込まれてしまいます。

●夫がDVであったBさんはこうおっしゃいました。「子供たちは夫のDVを見て育った。子どもたちを見ていると和解と赦しの心が育っていないように思える。夫は亡くなったが、今になってみると本当に夫だけが悪かったのだろうか?と思う。自分の人生の最後の宿題は和解と赦しだと思う。」

和解と赦し、人生はすべてこの一点に向かっていていると思います。人生を恨みと怒りを抱えて生きている人がいます。復讐したり、人を傷つけたり、最後まで恨みを抱いて死ぬことは愚かです。そんなあなたを愛し、あなたを赦して下さるキリストに出会い、恨みと怒りが消え、すべてを受け入れる人になって欲しいと願います。私

たち自身もまたそのようになりたいですし、キリストのように人を赦し、愛することによって世の怒り、憎しみを解いてゆく者になりたいと願います。